Year's end Song　/ ショート×3

ils2

1

校内スピーカーから流れてくる、今流行の音楽。
いつもは友人との対談に夢中で音に注意を注いだ事はない。
けど、今日は特にする事がない。
目の前の席は主を失いぽっかり空いた侭。

意識したくなくても自然と音に意識が傾く。
静まり返る教室に響く中性の声。
女っぽい男の声。甘くそして柔らかい感じ。
音は…結構好みの音だ。

デザインも音質も考量されてない、四角いだけの筐体。
機能さえすればソレで良いから。
突出した部分は排他され、ただ音を鳴らすだけに存在してる。
なのに、この音楽を鳴らしている今の間は
音楽を奏でる為に設置されている様に思える。

朝の限られた時間だけに行われる音楽会。
放送室に入っている誰かが、誰かに向けて発信している。
自慢の一枚を聴かせようとほくそ笑んで。
若しくは唯の自己満足。
どちらでも構わない。

一つ判った事は、
この曲の虜になったって事だ。
スピーカー横で時を刻む時計。
時刻は8時になる3分前。

音楽を鳴らす為に朝っぱらから学校に来る暇人はどんな奴だ。
自分を此所まで掻立てるなんて、よっぽどだ。
好奇心と興味がないまぜになり、心を奮い立たせる。
軽やかに席を立つ。目的は一つ。放送室に居る人に会う為に。

内から溢れ出る興奮が足を速めさせる。
この曲が流れ終わる前に、なんとしても着きたい。
冷たい空気が漂う廊下に響き渡る、温かいサウンド。
季節は一巡して冬から春へと移り変わりいく。

窓から見える樹木は小さな蕾を膨らましている。
春の訪れはもう直ぐ其処まで近づいている。
廊下に反響する己の足音。徐々に小走りになっていく。
後もう少し。後もう少しで辿り着く、
温もりを運んでくれる場所へと。